
令和2年度 第1回午後

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和2年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外^{ほか}のものを置いてはいけません。受験生^{くせんせい}どうしの貸し借り^{かかしかり}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は18ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

次の――線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

- ① 彼のハクガクさには、だれもが舌を巻く。
- ② 初めて一人でルスバンした時の気持ちを忘れない。
- ③ 新たに一冊のファッション雑誌がカンコウされた。
- ④ 冬の樹木の内部には、すでに春のメバエがある。
- ⑤ 立派な王がオサめる平和な国。
- ⑥ 耳と鼻の形は父からのイデンだ。
- ⑦ 新しい内閣総理ダイジンが誕生した。
- ⑧ 勝者と敗者は、タイシヨウ的な姿を示した。
- ⑨ 会社にある給湯室でお茶をいれる。
- ⑩ 腹を出してねたら、案の定、風邪をひいた。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私たちは、**A**「ことではじめて」**B**「ことを開始する。思考は疑問によって動き出すのだ。だが、ただ頭の中でグルグル考えていても、ぼんやりした（注1）想念が浮かんで消えるだけである。だから」**C**「ことが必要になる。きちんと言葉にして語ることで、考えていることが明確になる。そしてさらに問い、考え、語る。これを繰り返すと、思考は哲学的になっていく。

それで小学校では、この「問う」をもっと強調して、**D**「と言っている。学校をはじめ、世の中では、いろんなことを学んで分かることを増やし、分からないことを減らすのがいいとされる。哲学はその真逆である。分からないことがたくさんあれば、それだけ問うこと、考えることが増える。だから、どんどん分からなくなるのがいい、というのが哲学なのだ。

最近、学校だけでなく、セミナーやワークショップ、地域コミュニティなどで、社会人、主婦、教員など、一般の人たちの前でも哲学の話をするが増えたが、そのさいもこの二つの定義、「問い、考え、語ること」「分からないことを増やすこと」が、いちばん納得してもらえる。

さて、このような「問い、考え、語ること」という意味での哲学もまた、一般の哲学と同様、自問自答しながら「自己との対話」を通して一人で行うこともできる。だが、それはしばしば、孤独でつらい作業である。そういうことが好きだとう、いわゆる哲学者気質の人種もいる。（注2）沈黙考、物思いにふけるのに快感を覚える、そうせずにはいられない「思考中毒」の人間もいる。

とはいえ、そんなのは少数派の変人である。むしろ多くの人にとって、一人で考えるのは、面倒くさいことだろう。自分に語りかけていても、途中で行き詰まり、堂々巡りするだけで、**a** 罅が明かない。退屈だ。だからやる気になれない。考えるなんて嫌いだ。

ところが、他の人といっしょにやると、考えるのは楽しい。他の人と話し、語りかけ、応答してもらえればうれしい。嫌にならずに続けられる。しかもそうすれば、思考はより深く、豊かになる。だからそのような「考える体験」としての哲学は、他者との「対話」という形をとる。つまり哲学とは、「問い、考え、語り、聞くこと」なのである。

①素人がおしゃべりしているいろいろ考えたからといって、それが哲学になるのか、そこで考えていることには、哲学的な深みも(注3)厳密さもないんじゃないか、と思う人もいるだろう(とくに哲学研究者や哲学好きな人)。たしかに一人一人は、大したことを考えられるわけではないだろう。しかし、参加者がどれほど知的か、**b** 思慮深いか、学歴が高いかといった資質は、対話が哲学的になるかどうかには、ほとんど関係がない。哲学の知識があるかどうかとも、さほど重要ではない。大事なのは、対話に参加する人の多様性である。いろんな人がいることで、一人では思いつかない側面が見えてきたり、自分が知らずのうちに前提にしていることが明らかになったりして、今一度根本から考え直さないといけなくなる。

一般には、同じような境遇の人——同じ専門、職業、世代、性別、地域の人——どうして議論したほうが、話が深まるとかレベルの高い話ができると思われるのだが、哲学的な視点から見ると、そうではない。

同類の人たちで行う対話は、(注4)緻密かもしれないが、全体としては退屈なことが多い。価値観が似ていて、基本的な前提を問う直すことがないため、大枠では意見が一致しやすいからだ。

問題になるのは細かい違いだけで、それが大事なこともあるが、冷静に考えるとどうでもいいことも多い。いずれにせよ、根本的なことは問われない。これは哲学を専門とする人でも変わらない。

他方、いろんな立場の人たちが集まっていっしょに考えると、それぞれが普段自分では問わなかったこと、当たり前のようになっていることをおのずと問い、考えるようになる。前提を問う、(注5)自明なことをあらためて考える——それはまさしく哲学的な「体験」だろう。

誰がどのような体験をするのか、どんなことに気づき、何を問い直すのか、どのような意味で新しい見方に出会うのかは、その場にいる人によっても違う。ある人は、その人にしか当てはまらない個人的なことに気づくかもしれない。あるいは、

誰もが目を開かれるような深い（注6）洞察に、参加者みんなまで至るかもしれない。

その内容は、哲学という専門分野から見ても、興味深いものになっていくかもしれないが、初歩的なところにとどまったり、（注7）粗雑な議論になっていたりするのかもしれない。哲学の専門家や哲学好きな人は、話のレベルの高さや低さに一喜一憂するかもしれないが、それは専門家の勝手な趣味であって、私自身はあまり気にしていない。

そもそも議論の質が哲学的かどうかを判定するのは、思考力の（注8）鍛練のような特定の目標でもないかぎり、かえって哲学対話の広がりや可能性を狭めかねない。各々にとつて、その対話で「当たり前」を疑い、自分の考えや物の見方を深めたり広めたりできているのであれば、それはやはり「体験」としては哲学的なのだ。

体験が個人的であり、主観的であるなら、哲学的かどうかも個人的、主観的な問題であるはずだし、そうであっていい。それをその場にいるみんなで共有する。いろんな人がいれば、それだけ問いも考えも多様になり、深まり、広がりやすくなる。

いろんな人がいたほうがいいということは、実際に対話をする時は、人数がある程度は多いほうがいいということでもある。だから哲学対話の適正人数は10〜15人前後になる。

② ワークショップをやっている人から、この人数は多すぎるのではないかと、と言われることがある。ワークショップや（注9）ワールドカフェ、あるいは学校でグループワークをする時は、1グループあたり4〜5人であることが多いようだ。みんなが意見を言いやすいようにするためだという。

たしかにそのほうが、大人数の前で話をするより、発言はしやすいかもしれない。とくに人前で話をするのが苦手な人はそうだろう。しかし人数が少なければそのぶん、いろんな意見は出にくくなる。

③ 参加者の多様性は、対話が哲学的になるために非常に重要である。だからいろんな立場の人がいたほうがいいだけでなく、同じ境遇の人が多かったとしても、それなりに人数がいたほうがいい。

（梶谷真司『考えるとはどういうことか』より）

(注1) 想念ちんねん⇨心の中に思いうかべる考え

(注2) 沈思黙考ちんしもくこう⇨黙だまって物事を深く考えること

(注3) 徹底てつてい⇨細かいところまできびしく注意が行き届いていること

(注4) 緻密ちみつ⇨細かいところまで注意が行き届いていること

(注5) 自明じめい⇨証明などをしなくても、明らかであること

(注6) 洞察とうさつ⇨するどい観察で物事を見通すこと

(注7) 粗雑そざつ⇨細かいところまで注意が行きとどかないこと

(注8) 鍛練たんれん⇨きびしい訓練で技や心身をきたえること

(注9) ワールドカフェ⇨参加者が共通の問いについて対話し、考えを深める討論の方法

問1 本文中の空らん A C に入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア. 考える イ. 聞く ウ. 分かる エ. 問う オ. 語る

問2 本文中の空らん D に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 分かることを減らそう

イ. 分かることを増やそう

ウ. 分からないことを減らそう

エ. 分からないことを増やそう

問3 〓 線部 a 「埒が明かない」・ b 「思慮深い」のそれぞれの意味の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

a 「埒が明かない」

ア. 納得を得られない

イ. 事態が進展しない

ウ. 説明ができない

エ. 気分が晴れない

b 「思慮深い」

ア. 物事に対する愛着が強い様子

イ. 他者にあれこれ配慮する様子

ウ. 物事を注意深く考える様子

エ. 遠慮する気持ちが先立つ様子

問4 〓 線部① 「素人がおしゃべりしているいろいろ考えたからといって、それが哲学になるのか」とありますが、筆者はこ

うした疑問に対してどのように考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 哲学的な対話にとって大切なのは参加者個人の能力ではなく多様性であるため、哲学的になる。

イ. 対話に多様な人々が参加すれば、それぞれの専門的資質を生かせるため、哲学的になる場合もある。

ウ. 対話において重要なのは参加する人の多様性であるため、必ずしも対話が哲学的になる必要はない。

エ. 素人同士のおしゃべりでは哲学の知識が軽視されてしまい、哲学的な対話にはならない。

問5 ——線部②「ワークショップをやっている人から、この人数は多すぎるのではないか、と言われることがある」とありますが、筆者はこの意見に対してどのように考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. みんなが意見を言いやすいという点ではちょうどいい人数であるため、10～15人は多すぎるということはない。
- イ. 人数が多いと、それだけ専門的知識を持った人が増えるので、10～15人は必ずしも多いとは言いつれない。
- ウ. 大勢の人が参加することによって結果的に議論が深まり哲学的になるため、人数が多ければ多いほどいい。
- エ. 人数が多ければ、それだけ問いも考えも多様になり、深まり、広がりやすくなるため、10～15人でも多すぎない。

問6 ——線部③「参加者の多様性は、対話が哲学的になるために非常に重要である」とありますが、対話が哲学的になるために多様性が重要なのはなぜですか。その理由を本文中の言葉を用い、四十字以内で説明しなさい。ただし、「参加者が多様であれば、」という書き出しで始めること。なお、句読点などの記号も字数にふくめます。

三

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

中学二年の「私」が副部長を務める家庭科クラブに、同じクラスの野間君が家庭の事情で転部してきた。それまで野間君は卓球部所属の有望選手だったのでちよつとした話題になったが、ひと月もすると彼は家庭科クラブにもなじんだ。そんなある日、野間君が忘れた課題プリントのファイルを、「私」が野間君の自宅に届けに行き、彼が転部した理由をお母さんから聞いた。次の文章は、その翌日の場面である。

次の日、授業が始まる前に、野間君が私のところに来て言った。

「昨日、ありがとう、ファイル。わざわざ家にまで届けに来てもらっちゃって。助かったよ」

「う、うん」

しばらく沈黙があり、数秒目が合う。何かほかに言いたいことがあるようだったが、続く言葉はなかった。

野間君は、私有家の事情を聞いたことを知ったんだろうか。でも確かめることはできない。

チャイムが鳴り、野間君は自分の席に戻っていった。

しばらく気になっていたが、その後部活の時は、至って普通で、いつもと変わりなかった。むしろ今までよりも表情が明るく元氣そうに見えた。

きつとお母さんが良くなったんだ。

良かったと思うと同時に、もしかしたら卓球部に戻るんじゃないか、いや、卓球部じゃなくてもほかの部が変わるかも、という考えが浮かび、ひどく動揺している自分に戸惑う。

でももしそうだったとしても、それは彼の自由で、どうすることもできないのだ。

十一月下旬、期末試験準備のため、しばらく部活動が中止になった。

十二月の初めに、期末も終わり、また部活動が再開された。

早い子は、もうマフラーが仕上がっていた。中原君に渡したという三年の先輩もいた。中原君は、上級生の女子にも人気があった。

「野間君はどうするの、マフラー。自分使い？」

たまたま家庭科室で二人になったとき、訊いてみた。

野間君は、クリアなブルーのマフラーを編んでいた。私は、後輩に「渋いつすね」と言われたモスグリーンだ。

「うーん、どうしよつかな、決めてないよ」

「じゃあさ、じゃあさ、交換しない？ 私のと」

「えっ」

「そのほうが張り合いあるでしょ。ただ編んでいるのよりも」

「え、でも」

「あ、別に、やだったらいいの。ちよつと言ってみただけ」

「やじゃないよ。じゃなくて、僕、初めてで下手だから、そんなのと、上手な伊藤さんのと交換じゃ悪いと思って」

「そんなことないよつ。じゃあいんだね。決まりね」

「うん」

野間君が笑顔で答える。

せっかくプレゼントするのなら、と彼のイニシャルを入れることにした。

編みながらどこか浮き立つ気分を感じ、^①いやこれはプレゼントじゃない、ただの交換、日頃の部活の成果をお互い確認するためだ、と自分に言い聞かせる。

終業式の後、今年最後の部活があった。

普段はないのだが、家庭科室の棚の大掃除があったのだ。その帰り、別に申し合わせたわけではないが、いつかの日のように二人で並んで校門を出た。

冬の日、落ちるのが早く、あたりは葡萄色の夕暮れが始まっていた。風に煽られて、道に落ちた枯れ葉が乾いた音を立てる。

「あ、これ」

川沿いの道に差しかかると、野間君が足を止め、カバンからコバルトブルーのマフラーを取り出す。

「あ、私も」 私も自分で編んだマフラーを手提げ袋から出す。

しかし取り出してみたものの、改めて向き合おうと、なんだか照れてしまう。

どうしようかと思つて、手元のマフラーに視線を落とすとその瞬間、首元がふわりと暖かくなった。

野間君が、マフラーをかけてくれたのだ。

「副部长、お疲れ様でした」

日が翳ってきたせいで、野間君の顔の陰影が増し、大人びて見えた。私も慌てて、彼の首にマフラーをかける。

「あ、すごい、イニシャル入りだ」

すぐに気がついて言う。私のも見ると、小さなてんとう虫のボタンが付いていた。

「ごめん、僕、イニシャルとかまだできないから、家にあったのを付けただけなんだけど」

「ううん、すごく可愛い。ありがとう」

照れ隠しのように笑い合う。

「じゃあこれは同志の証明ね」

「同志？」

「そう、同じ、家庭科の先生を目指す同志の」

「え、伊藤さんもその気になったんだ」

「まあね。だからお互い頑張りましょう、つてことで」

② わざとおどけた口調で言う。

「うん、頑張ろう」

野間君の最後の言葉が力強く響いた。

冬休みに入り、慌ただしく年末年始が過ぎ（毎年のことだが）、比較的長めの冬休みが終わって（うちの地域は、寒さが厳しいので、夏休みを減らし、その分冬休みを長くしている）、初登校の日、私はあのコバルトブルーのマフラーをして学校に行つた。

野間君も私のマフラー、できてくれてるだろうか。

ドキドキしながら教室に入る。

しかしそこに彼の姿はなかった。

空っぽの机がぼつんとあるだけだった。

どうしたんだろう。新学期早々お休みかな。風邪でもひいたのかな。

体育館で始業式をやった後、教室に戻つてくると、先生がまず初めに言った。

「急な話で驚かれるかもしれませんが、野間克己君は、おうちの事情で愛媛県に越されました。クラスの人々にもよろしく伝えておいてくださいということですよ」

教室がどよめく。

ええーっ、嘘。なんで。

どうして。聞いている？ 知らない。

なんで、なんで。ざわめきが止まらない。

嘘。

それしか出てこない。そんなのは嘘だと。頭の血がすうっと下がるような感覚があり、海の底にいるように、周りの音が小さくなったり大きくなったり反響して聞こえる。

嘘、嘘、嘘。

馬鹿みたいにその言葉しか出てこない。

それからは何が変わったのか、ほとんど記憶がなく、気がつけば、教室に残っているのは私ひとりだった。今日は始業式だけだから、もうみんないつの間にか帰ったらしい。

私は自分の席から立つこともできずにそこにいた。自分の体じゃないみたいに力が入らない。教室は、金粉をまぶしたような冬のやわらかい日差しに満ちていた。

「やっぱり。まだ残ってたんだ」

声に振り向くと、中原君だった。

「大丈夫？」

私の前の席の机に腰をかける。

「な、中原君、もしかして知ってる？ 野間君のこと、何か聞いてる？」

食いつくようにして言う私に、中原君は学生服の胸ポケットを探り、一枚の紙を取り出した。四つ折りにたたまれたそこには、愛媛県〇〇市、と書かれた住所と電話番号が書かれていた。

「どうして、中原君がこれ？」

「冬休み始まってすぐ、あいつから連絡来て、これ渡された」

「なんでっ、なんで中原君に？ 私じゃなくて、どうして中原君なの？ 中原君なんて、野間君と親しくなかなかつたじゃないっ」

言った後で、言いすぎたと思ったが、中原君は別段気を悪くしたふうでもなく、小さく息をつくど、

「親しいからこそ、よく思っているからこそ、言いにくいことってあるんじゃないかな」

静かな声で言う。私は黙ってうつむいて、机の上で組み合わせた自分の指をひたすら見つめていた。

「母親が、愛媛の（注）ホスピス入るんだって」

「え、ホスピス、って」

驚いて顔を上げる。

「向こうに親戚がいるとかで、いい施設に入れることになって」

「待って、待って。ホスピスって、どういうこと？ だって退院したって、少し前に、野間君のお母さんと話したもん、それおかしいよ。それ違うよ」

「良くなったから退院したってわけじゃないんだよ。帰されたんだよ、良くなる見込みがないから」

「そんな、だって、そんなことひと言も、全然、何も言ってなかったもんつ。野間君だって、全然、普通に元気だったもんつ。嘘言わないでよつ」

息を荒らげて中原君を見る。④ 湖面のような瞳がこちらを見つめている。

「野間んち、小さい頃父親を亡くしてて、それ以来、ずっと母親が働いて子供二人育ててたんだよ。母親は仕事、いくつも掛け持ちして、睡眠時間削って。働き詰めだったけど、全然弱音とか吐かない人だったらしいよ。自分のことは二の次、三の次でさ。でもそれが災いして、がんが発見されたときはもう手遅れだったらしい。野間は自分たちのせいだって、自分を責めてたけど」

聞いているうちに心臓が痛くなる。

「私も知らなかった。知らなかったの」

手で顔を覆う。指の隙間から涙がこぼれ出る。

「知られたくなかったんじゃないの」

「どうして？ 信用されてないから？」

静かに首を振る中原君。

「悲しい思いをさせたくない人だからじゃないかな」

⑤ それは無理だよ、野間君。

どのみち、私はこんなにも悲しい。

教室に私のすすり泣く声が響く。

泣き濡れた顔を上げ、しゃくり上げながら訊く。

「ねえ、愛媛って行ったことある？」

「ないな」

「私も。でもいいとこなんですよ。温暖な気候で、瀬戸内海せとないかいに面してて。少なくとも極寒酷暑ごっかんこくしよのこんなところよりはずつとい
いよ。だからさ、病気なんか良くなるんじゃないかな、そういう環境かんきやうに恵まれたところに行けば、ね」

すがるように見るが、中原君は黙っている。

わかってる。こういう時中原君は、安易な気休めを言う人じゃない。

「だと、いいな」

短くそれだけ言った。

「そうだよつ、だって、だって、お母さんがいなくなったら、野間君は、妹は、どうなっちゃうの？」
そう言うと、また涙があふれてきた。自分のことではなく、誰かだれを思つて泣くのは初めてだった。

中原君に、何度も「大丈夫か？」と訊かれ、「送ろうか」とも言われたが断った。ひとりで帰りがかった。「連絡先は？
書き写さなくてもいいのか？」とも訊かれたが、それにも首を振った。

「そっか。じゃあ必要になったら、いつでも言つてくれよ」

中原君は連絡先の書かれた紙をまた四つ折りにして、胸ポケットにしまった。

野間君と二人で帰った同じ道を帰る。

あの日、マフラーを交換したのと同じ場所に立ってみる。北風が容赦なく吹きつけ、髪を逆立てる。風の冷たさに、マフラーを口元まで引き上げる。

愛媛はあつかいから、マフラーなんかしていないかな。

でも野間君がどこにいても、大人になっても、私がこのマフラーをしていたらすぐにわかるよね。だって だから。二人で、家庭科の先生になるんだもの。そう約束したんだから。見上げた空の色は、マフラーと同じ、輝くような青だった。

(鈴木るりか『14歳、明日の時間割』より)

(注) ホスピス＝死期の近い患者に安らぎを与え、看護する施設

問 1 — 線部①「いやこれはプレゼントじゃない、ただの交換、日頃の部活の成果をお互い確認するためだ」とあります

が、このときの「私」の様子の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 副部長としてマフラーを編む技術の向上を最優先にしようとしている。

イ. 野間君を思つてはずんだ気持ちを落ち着かせようとしている。

ウ. 野間君に対する気持ちをマフラーのできばえで示そうとしている。

エ. 浮かれて野間君の気持ちを考えていなかったと自分を責めている。

問 2 — 線部②「わざとおどけた口調で言う」とありますが、「私」がこのように言ったのはなぜですか。その理由の説

明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 調子を合わせて言っただけの将来の夢を本心だと勘違いされないうため。

イ. 思わず野間君に対する好意を口走ってしまったことをごまかすため。

ウ. 野間君と向き合つて将来の夢をまっすぐに語る恥ずかしさを取りつくりうため。

エ. 家庭の事情によつて夢の実現が難しい野間君の気持ちを明るくするため。

問 3 — 線部③「野間君と親しくなかなかつたじゃないつ」とありますが、なぜこのような言い方をしたのですか。

その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 野間君が急にいなくなったことで冷静さを失い、他人を気づかう余裕がなくなっているから。

イ. 野間君と中原君の関係から中原君の話がいいかげんな嘘だと考え、中原君をばかにしているから。

ウ. 自分の知らないところで野間君と中原君が親しくしていたことが許せなかつたから。

エ. 野間君に約束を破られたことに腹を立て、だれかれかまわず攻撃的になつていいるから。

問 4 — 線部④「湖面のような瞳」とありますが、この表現は中原君のどのような様子を表していますか。その説明と

して最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 「私」とのトラブルを避けるために、自分の気持ちをおさえようとしている様子。

イ. 野間君の母親の病状について自分だけ知っていたので、「私」に対してすまなく思っている様子。

ウ. 受け入れなければならない状況をいつまでも拒否する「私」を冷たくつき放す様子。

エ. 野間君の事情を知ってあわてふためいている「私」に比べて、冷静でいる様子。

問 5 — 線部⑤「それは無理だよ、野間君」とありますが、「私」がこのように考えるのはなぜですか。その理由の説明

として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 野間君が自分の引越しの理由を隠そうとしても、結局、「私」は必死にその理由を聞こうとするから。

イ. たとえ野間君が引越した本当の理由を知らなかったとしても、野間君と離れること自体が悲しいから。

ウ. 野間君は「私」に配慮をしているが、つまりそれは「私」を信用していないということであるから。

エ. 野間君は中原君だけに引越しの理由を教えたつもりだろうが、いずれ「私」にも伝わってしまうから。

問 6 本文中の空らん に入る言葉を本文中から五字でぬき出して答えなさい。

問7 この小説を読んだAとDが〈野間君の行動〉について話し合っています。この会話を読んで後の設問(1)(2)に答えなさい。

A. 二人がマフラーを交換する前に野間君の引越しが決まっていたかどうかはこの文章からは確定できないよね。「私」はお母さんに会ってはいるようだけど。

B. 仮に引越しが決まっていたとして読み直すと、交換した時に「野間君の最後の言葉が力強く響いた」のは、野間君が「私」に伝えたい思いがあったからこそ、そのように聞こえたのかもしれないね。

C. あえて野間君が「私」に連絡先を渡さなかった理由が気になるな。二人の会話から考えるに、そもそも「私」のように家庭科の先生を目指していなかったことの後ろめたさからではないかな。

D. 中原君が「私」を落ち着かせるために、野間君の気持ちをくみ取っている言葉がヒントになるよね。でも、あくまで中原君の推測だから根拠こんきょとしては十分ではないね。

(1) 内容を明らかに読みまちがえているのはだれですか。一人選び、AとDの記号で答えなさい。

(2) 右の(1)で選んだ発言のどこがなぜまちがっているか、わかりやすく説明しなさい。なお、解答の字数が多いか少ないかについては、評価に直接の影響えいへいはありません。

(おわり)

国語
解答
用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

(注意) ※のらんには何も書かないこと

⑥		①	
⑦		②	
⑧		③	
⑨		④	
⑩		⑤	

問 1
A
B
C

問 2
a
b

問 4
問 5

問 6		
		参
		加
		者
		が
		多
		様
		で
		あ
		れ
		ば
		、

三
問 1
問 2
問 3

問 4
問 5
問 6

問 7					
(2)					(1)

※

※

※

※

※

※